

小角豆 牛部屋のかこひと見ゆれさしげ垣

南 瓜 傾城も南瓜の畑で生れけり

秋

立 秋

骸骨に何やらひびく今朝の秋  
むく起や身ふるひ一つ今朝の秋  
老僧が拂子動かす今朝の秋  
湖のひつそりとして今朝の秋  
秋立つと知らずや人の水鏡  
禪寺に秋立つ壁の破れ哉  
風鈴のちろくと秋の立にけり  
今朝の秋扇のかなめ外れたり  
西吹くと水士のいふなりけさの秋

最上川(二包)

初秋

旅人や秋立つ船の最上川  
旅の秋立つや最上の船の中  
見て居れば見えて秋来る二本杉

初秋の馬洗ひけり最上河  
初秋や梢に語る松つくり

古口の旅亭にて

初秋に大事がらるゝ宿り哉

文月

文月や硯にうつす星の影

盆過

盆過の村静かなり猿廻し

残暑

學校の此頃やすむ残暑哉

家の向き西日に残る暑さ哉  
蚊の勢を又立て直す残暑哉

最上川

箆帆の風に暑さの残りけり

出羽行脚の時錢蓋底淋しく行末覺東なければ菓子喰ひ

たる茶屋には茶代おかの事にきほめて

松風の價をねざる残暑哉

すさまし

水飯の色すさましき白さ哉

妙義山

雨少し月はれて山すさましき

湯田温泉

肌寒み寐ぬよすがらや温泉の匂ひ

うそ寒 さぬくや柳の風のうそ寒し

朝寒 朝寒や青菜ちらばる市の跡

朝寒 や看板残る氷店

鳴雪翁を訪ひて

身に入む 俳諧の話身にしむ二人哉

秋寒 秋寒し眼の光る鬼女の面

夜寒 錢湯に端唄のはやる夜寒哉

壁やれてともし火もるゝ夜寒哉  
向ひ地のともし消え行く夜寒哉  
挑灯の廟へ通ふ夜寒哉

封切て灯をかきたてる夜寒哉  
晝中の残暑にかはる夜寒哉  
文机にもたれ心の夜寒哉  
槍の穂の番所に光る夜寒哉  
夜寒さや身をちゝむれば眠くなる

品川

傾城の海を背にする夜寒哉

神田祭

夜寒さの樽天王の勢ひ哉

妙義の旅宿に妓樓の蒲團をかりて

傾城のぬけがらに寐る夜寒哉

二百十日 我背戸に二百十日の茄子哉

夜長

大黒の夷をなぶる夜長哉  
 瀬田こえて三井の鐘きく夜長哉  
 長生を思へば遠き夜長哉  
 桃太郎の話もたえて夜長哉  
 瀧の香のいろくになる夜長哉  
 叡山へ提灯通ふ夜長哉  
 長き夜や鼠のかじる古鳥帽子  
 長き夜の寝物語りや蝦夷千嶋  
 長き夜や頻りにはじく桶の箍  
 長き夜や誰がうつり香の薄蒲團  
 妹に軍書讀まする夜長哉

妙義の旅亭に妓樓の蒲團をかりて

病中

秋夕

牛一つおくる、秋の夕哉  
 秋晴て故人の來る夕哉  
 山行くや秋の夕日の影法師

秋の暮

うつくしう淋しき虹や秋の暮  
 海ひたす入日淋しや秋の暮  
 いたづらな子は寐入けり秋の暮  
 狸ぬれて葎に歸る秋の暮  
 命には何事もなし秋の暮  
 亡き兄のまぼろし悲し秋の暮  
 聲高き人まじりけり秋の暮  
 無住寺の門叩きけり秋の暮  
 なき人のあらば尋ねん秋の暮  
 秋の暮我身の上に風ぞ吹く

行 秋  
秋 日和

秋の暮屋根に鳥の評議哉  
秋の暮女を見れば猶淋し  
秋の暮まぎらかさんと出て歩行  
旅中  
宿とつて見れば淋しや秋の暮  
玩具  
絲引て人躍らすや秋の暮  
鳥海にかたまる雲や秋日和  
はてもなき秋の行方や外が濱  
風吹て秋行く水の音寒し  
はてしなき世界の秋の行方哉  
行く秋や紅葉の中の一軒家

龍田姫

行く秋の淋しくなりし田面哉  
行く秋や油かわきし枕紙  
行く秋をさらに妙義の山めぐり  
大井村聖天にて  
秋行くや大根二股にわれそめて  
水中竹枝の畫讀  
行く秋や水の中にも風の音  
目黒王子と狩りくらし  
行く秋の一日秋を盡しけり  
佐保姫は娘龍田姫は後家なりけり  
我笠に龍田姫の裾かゝるなり  
山鳥の戀に狂ふや龍田姫

秋 雜

つゝくりと五位の立けり川の秋  
行列の松にかゝるや里の秋  
塀ごしに腕出す松や朝の秋  
樓に上れば洞庭開いて秋遠し  
風吹て簫聞く夜の秋遠し  
鹿の秋牛の秋さへ悲しきを  
秋に瘦せて恨みの筆のあと細し  
夕やけや星きら〜と秋の不二  
秋晴て物見に近し秋の不二  
秋晴て不二のうしろに入日哉  
秋高し雲より上を鳥かける  
酒のんで秋淋しがる一人哉  
谷中道乞食を秋の姿哉  
秋高う入海晴れて鶴一羽

新夫婦来る

花聲に何をくはさん庵の秋

八郎海

八郎の姿を見れば秋なりける

奥州行脚より歸りて

みちのくを出てにぎはしや江戸の秋

はせを翁二百年忌といふ今年

俳諧の秋さびてより二百年

上野東照宮

秋淋し毛蟲はひ行く石疊

七 夕

七夕の袖やかざさん夕あらし  
草鞋屋は草鞋をかせよ女七夕  
七夕や牛の角にも露の玉

梶の葉

女房に何を語らん星こよひ  
七夕の雨やいづこの牛の聲  
星の夜に誰そや小川を渡る音  
七夕の夜は牛の尾に明けにけり  
曉のしづかに星の別れ哉  
旅中  
うれしさや七夕竹の中を行く  
梶の葉に雜の歌書く女哉

魂祭

乞食が賣りに出でけり蓮の花  
つらくとならび給へり魂祭  
魂棚や壁のひまもる夕つく日  
魂まつり悲しきものと覚えけり

草市

牛なくや其牛かひの魂まつり

生身魂

草市にねざる心のあはれなり  
生身魂我は芋にてまつられん

燈籠

燈籠の火消えなんとす此夕

走馬燈

風吹て廻燈籠の浮世かな  
灯の消えて闇路をめぐる燈籠哉

魂送

風吹て聖靈いそぐ歸り道

施餓鬼

施餓鬼會や水音更る後夜の鐘

踊

角

やせ村に老もこぞりし踊かな  
 宵の間の角力くづれて踊哉  
 しかすがに胸うちさわぐ踊哉  
 背の高い人のこにくき踊哉  
 踊りけり腰にぶらつく奉加帳  
 くらがりに聲を力の角力哉  
 角力取いづれ江戸絹京錦  
 角力見の人上りけり稻荷堂  
 うつくしき秋を名乗るや角力取  
 一休の投げつけられし角力哉  
 夕月や京のはづれの辻角力  
 いとし妻もつとしもあらず角力取  
 風吹て淋しき宵の角力哉

捨 團 扇

投げやればすねて落たる團扇哉  
神田祭  
 捨團扇風と化なる夜のイけり樽天王

花 火

木の末に遠くの花火開きけり  
 風吹てかたよる空の花火哉

八 朔

浪人の尺八淋し田面の日  
 八朔や朝日静かに稻の波

砧

牛馴れて夢驚かぬ砧哉  
 寐た牛の鼻先にうつ砧哉  
 三千の遊女に砧うたせばや  
 淋しさは裸男の砧かな



鳴子

年々に歳の傾く砧哉  
星ちるや多摩の里人砧打つ  
一村は女や多き小夜砧  
ふんどしになる白布を砧哉  
風吹て鹿風やんで砧かな

山里にひとりゆれたる鳴子哉  
風吹て山本遠き鳴子哉

案山子

朝見れば笠落したる案山子哉  
どちらから見てもうしろの案山子哉  
山畑は笠に雲おく案山子哉  
風蓑を吹て案山子入相を勇むかと  
魂はふくべなりけり瘦案山子

新酒

山嵐くるや案山子の片くづれ

竹立て、新酒の風の匂ひかな  
横波にゆさぶる船の新酒哉  
新酒かけて見ばや祇王の墓の上  
船頭の風に吹かる、新酒哉

御遷宮

母親を負うて出でけり御遷宮

鳩吹

山もとや鳩吹く聲の消えて行く

秋風

白河や二度こゆる時秋の風  
古井戸の名はわすられて秋の風

品川は海をひかへて秋の風  
賣物の大名屋敷秋の風  
秋風やわれは可もなく不可もなし  
秋風やあはれ氣もなき俳諧師  
秋風や妙義の岩に雲はしる  
秋風や脳味噌くさる芥子坊主  
秋の風われを相手に吹きにけり  
うしろ向けば我にも吹くや秋の風  
秋風や通ひなれたる箱根山  
秋風や巫ふり亂す髪のとけ  
秋風のおもてに立てり筑波山  
秋風や道に横たふ蛇のから  
秋風や故郷さして歸る人

浅草五階樓  
秋風や屋根に淋しき金の風  
最上川(二句)  
秋風の吹きひろげり川の幅  
秋風や下駄流したる最上川  
旅中立秋  
そよくと秋風吹きぬ單衣  
旅中(二句)  
面白や草鞋はく日の秋の風  
笠の端に山かさなりて秋の風  
秋田  
落の葉のやぶるゝ音や秋の風  
湯田温泉  
秋風や人あらはなる山の宿

背に吹くや五十四郡の秋の風

片腕は斬られて左文様と號せし梅壺をいたむ

片腕の位牌になりぬ秋の風

行脚より歸り梅壺のみまかりたるよし聞きて

はや一つ命へらしぬ秋の風

梅壺五十日に

秋風や泪つもりて五十日

虎女を悼む

肥肉の目には見ゆれど秋の風

男子を擧げたる人に遺す

秋風に生れてさすが男哉

佐夜中山

秋風よ命ばかりは吹きのこせ

王子松宇亭

都から一里はなれて秋の風

傾城書

骸骨と我には見えて秋の風

來山がもてりし女人形なりとて江左氏の持てるを見て

秋風に兀ても昔女かな

はて知らずの記の後に題す

秋風や旅の浮世の果知らず

じりくとよるとも見えす星二つ

星合  
天河

天の川高燈籠にかゝりけり

山こすや左にうけて天の川

桑名から宮や七里の天の川

稻妻

目をくばる空の廣さよ天の川  
 じりく〜とねぢれて近し天の川  
 旅中  
 宿もなき旅の夜更けぬ天の川  
 湯田温泉  
 山の温泉や裸の上の天の川  
 洪水  
 家もなし水滔々として天の川  
 風吹てちるやほろ〜稻光り  
 稻妻に人見かけたる野道哉  
 稻妻やたえずひらめく一處  
 稻妻やほつとりとする薄曇り  
 稻妻のはらつく海や小豆嶋

稻妻の花さく沖の小嶋哉  
 稻妻や狸のふぐり牛の角  
 稻妻や赤猫狂ふ塔の尖  
 大佛の眠りさますや稻光り  
 稻妻をしきりにこぼす夕哉  
 稻妻や一むれさわぐ女馬  
 稻妻や生血したゝるつるし熊  
 稻妻をかまへて御らんじ候な  
 稻妻の北極めぐる曇り哉  
 稻妻や戌亥の雲のたゞならず  
 風吹て稻妻ちらす曇り哉  
 銀貨相場の亂高下に  
 金銀の色よ稻妻西東

鬼念佛圖

露

稻妻に顔おそろしき念佛哉

奎星館に織細工の美人の首を見る

稻妻や關に美人の笑ひ聲

東照宮

稻妻や金碧うつる杉の隙

朝市や鯛にかぶさる笹の露

夕露の光るむしろや芝居小屋

雨ながら露に明け行く野山哉

夕風や葱をはしる露の玉

湯田温泉

白露に家四五軒の小村哉

梅壺墓

新墓に誰の涙そ露の玉

悼

鬼ひしぐこぶしも露の宿り哉

霧

曉の霧しづかなり中禪寺

霧晴れて妙義は天を衝かんとす

川音や萬馬肅として霧の中

朝霧や咫尺山見えす蚤小舟

吹き下ろす霧やもつるゝ牛の角

霧晴れて小原女山を下る見ゆ

霧に立つや蝸牛の角の山二つ

風吹て霧にまかるゝ伽藍かな

朝霧や杉の木末の圓城寺

最上川(四句)

朝霧や舟かゝり居る裏戸口

初 嵐

瀬の音や霧に明け行く最上川  
朝霧や四十八瀧下り船  
瀧とぶや霧にもつれて尾上より

庵の巢の吹き落されぬ初嵐  
雨なしに吹き出だしけり初嵐  
朝顔の花やぶれけり初嵐  
雛の時に小さし初嵐

他郷嵐にあひける夜東京の草庵を憶ひて

恙なきや庵の葬初嵐  
猿の手のちぎれて悲し初嵐

野 分

捨鐘の吹きとられたる野分哉  
大佛のなひくかと思ふ野分哉

盆 の 月

釣鐘を吹き残したる野分哉  
三井寺の釣鐘なびく野分哉  
小鼓の棚より落つる野分哉  
雞頭のしどろになりし野分哉  
民の田の見えてものうき野分哉  
ものうさは日の照りながら野分哉  
星飛んであとは淋しき野分哉  
立琴にから鳴絶えぬ野分哉  
しづくと野分のあとの旭かな  
犬吠て野分すべき夜のけしきかな  
野分して飯くふ人の寒げなり  
驚つくむ野分のあとの澤邊哉

盆の月亡者の歸る鉦の音

名  
月

名月やあはれ一こゑの杜宇  
名月やあからさまなる局口  
名月やわれは根岸の四疊半  
名月や都大路の馬車  
名月のきのふになりて晴れにけり  
名月や雨戸のすきの面白き  
名月や上野は庵の歸り道  
名月や雲かくるべき隈もなし  
名月や納屋のうしろに人の影  
名月や大路小路の京の人  
名月や仙人掌上の玉芙蓉  
月こよひ香は三五十五文  
けふの月見るや箱根に腰かけて  
あすの月きのふの月の中にけふ

病む人の思ひをくもるけふの月  
雪の富士花の芳野もけふの月  
都にはともしの山やけふの月  
芋女園子男をけふの月  
橋二つ三つ漕ぎ出でて月見哉  
名月や葺の煙立ち並ぶ  
名月の絶えずこぼるゝ寛哉  
名月や闇のかた行く醫者の駕  
名月のふけて外行く小唄哉  
名月や山を下り来るから車  
名月の小雨となつてしまひけり  
名月の障子をとほす光哉  
はたごやの名月雨戸しめられぬ  
更科の人家は寐たりけふの月

浮草に泥鎗も浮きぬけふの月  
一寸の草に影ありけふの月  
晩鐘の聲の上よりけふの月  
月こよひ山より海をながめけり  
鐘つかば唐へひびかんけふの月  
ごほくと下女のいびきやけふの月  
鳥は果報な鳥よけふの月  
乞食の薦引被る月見哉  
樋の口に鼠顔出す月見哉  
なまじひに降りも出ださぬ今宵哉  
月見るや上野は江戸の比叡山  
奥殿に座頭もまじる月見哉  
根岸草庵  
ありくだけの庭は持ちけりけふの月

待宵

月

軒する門叩かばや今日の月  
索麴を人に贈る時  
索麴の漉に李白の月見せよ  
兩國橋  
灯の渡る橋の長さや聞こよひ  
待宵のくもらばくもれ箱根山  
待宵の猶たのもしや月の缺  
待宵をにくらし誰の高軒  
待宵や降ても晴ても面白き  
象潟や山低うして三日の月  
樂書の佛と見えぬ法の月  
月青し杉の木の間の闍魔堂



杖を投げて橋となさばや水の月  
月の出を取りに往かうよ東山  
梟の眼玉も見えず杉の月  
有明の四條を渡る白拍子  
行きくれて大根畑の月夜哉  
海原や松にもつかず秋の月  
月酒に酔ふ我はた月に酔て舞ふ  
石山や駒のりすてし月の門  
山高く月小にして人舟にあり  
夕月は餘りに長し瀬田の橋  
三人の一人は月をせがひかな  
鯉はねて月のさゝ波つくりけり  
月に寐ぬ昔女の小唄かな  
月さすや留守になつたる燕の巢

鐘著て衆徒のならびし月夜哉

出羽旅中

夕月や車のりこむ大曲り

異國王子我國へ來りしに

この國は日も善い月も善い處

明を失ひたる人に

月の出を松の雫に聞けとこそ

男子をまうけたる人に遣す

桂男うぶ聲高し月の秋

行脚より歸れば鄰家の人去りてあたり物淋しきに

琴の音のなくて淋しき月夜哉

王子松宇亭

罪なくて配所の月とうたひけり

陰曆九月十三夜吉原のにはかを見てそれより隅田川に遊ぶ

大門を出でて隅田の月夜哉

嵐雨秋月(王子八景之一)

月満ちて小豆の飯に芋一串

相馬事件証告録

日西に晴れ月は東に曇りけり

乾

ある夜月明らかに龍の躍り哉

實相房僧正

松風や月の障子に法の影

菴室禪僧を打たんとす

水の月杖ふりあげて打たんとす

十六夜社を出れば十六夜の月上りけり

後の月葉まばらに柚子あらはるゝ後の月

九月の月長月は十六夜といはであはれなり

年もはや六十の月の名残哉

春日局像

秋老て九月の月の皴寒し

星月夜洪水の勢ひや空は星月夜

秋雨みちのくのはてゝあひけり秋の雨

杉暗く鴉なくなり秋の雨

子鴉の人を恐れず秋の雨

犬瘦せて山門淋し秋の雨

古沼に鷺も動かす秋の雨

秋 空

秋の空按摩の瘤をはなれたり

秋 聲

茶碗たゞく乞食もあらん秋の聲

秋の夕日

谷深く舟漕ぐ秋の夕日哉  
杉暗く忌垣に秋の夕日哉

花 野

手をあげて尼の呼びあふ花野哉  
から駕籠の近道戻る花野哉  
露にぬれて花野の雀狂ひけり  
僧一人立ちつくしたる花野哉  
其人戀の名もありさうな花野哉

秋の山

雨晴れて馬頭に近し秋の山

秋の水

朝なくと稻妻かくす秋の水

秋の海

ながくと安房の岬や秋の海  
出羽夕陽に馬洗ひけり秋の海

初 汐

初汐や渚をたどる鶴の足  
初汐やはかなきものはうつせ貝  
初汐の下を流るゝ角田川

鹿

鹿なくや尾上にかゝる天の川

踏霜鹿

霜ふんで鹿曉の山にたつ

雁

大佛の御手を渡るか關の雁  
行在は雨の漏りけり雁の聲  
初雁の我を見かけていそぐなり  
波ぎはや二度來た雁の二ならび  
旅鳥雁にまじりてあはれなり  
やよ雁よどこまで往ても鳩の海  
初雁があれく山の向うから  
月の出や皆首立てゝ小田の雁  
雁のつら我家の上へ鳴いて來る  
風吹てくの字にまがる雁の棹

羅漢讀

鐵鉢の中へ落ちけり雁の聲

渡鳥

堅田なり雁の居ぬ夜のおもしろや

崩れては返し寄せては渡り鳥  
ひたすらにそなたとばかり渡り鳥  
牛積んだ船の上より渡り鳥  
爲朝の鶯のさきや渡り鳥

最上川

鵲

鵲鶴の見えそめてより山けはし

鳴

淋しさを立ち行く鳴の夕哉

鴉

鴉なくや雑木の中の古社  
鴉なくや夕日に歸る松葉搔き

歸 燕

賜ないて大根畑の日和哉

歸りかけて又立ち戻る燕哉  
燕や家をめぐりて暇ごひ

鶴

鶴の聲ばかりなり箱根山

啄木鳥

啄木鳥の來て錦木を倒しけり

雀 爲 蛤

蛤になるか雀の聲かなし

鱸

龍あけて雑魚にまじりし鱸哉

蛸

蛸や森は夕日の古社

茶 香 亭

蛸や飯くふ窓に椶の影

山上より山麓の人家を見ながら路遠く日のくれかゝるに

蛸や夕日の里は見えながら

小 會

蛸や夕日の座敷十の影

最上川

蛸や乗合舟のかしましき

清川に戊辰戦争のあとを見て

蛸の二十五年もむかし哉

蜻 蜓

蜻蜓を相手に上る峠かな  
蜻蜓のうつる西日や竹格子

最上川舟中

秋の蠅

蜻蛉や追ひつきかぬる下り船

秋の蠅叩かれ易くなりけり

秋の蠅二尺のうちを立ち去らす

旅宿に滞在して

はたごやにわれをなぶるか秋の蠅

秋の蠅拂子の髭にとまりけり

秋の蝶

秋の蝶祇王の袖にかくれけり

炭竈をめぐりて秋の胡蝶哉

秋の蚊

秋の蚊や死ぬる覺悟でわれを刺す

秋の蚊の聲ばかりするあはれなり

待つ戀を又秋の蚊にさされけり

蟲

蟋蟀

旅人のいそぐ夜山や蟲の聲  
駕籠昇の喧嘩も過ぎて蟲の聲

箆ふせて置けば晝鳴くきりくす  
旅人の草鞋すてたりきりくす  
曉や廚子を飛び出るきりくす  
夜をこめて麥つく音やきりくす  
井戸掘の焚火のあとやきりくす

襪織

狭筵に機織鳴けば足寒し

鈴蟲

鈴蟲の籠に燈籠の月夜哉

馬

夜嵐や黒木くづれて鳴くいとこ

菱蟲啼

菱蟲の妹戀しとは鳴かぬなり  
菱蟲の首ちよめたる嵐哉

木 槿

木槿咲く土手の人馬や酒田道  
白木槿鳥海山を見こし哉  
馬ひとり木槿にそうて曲りけり  
繪屏風に木槿を漏るゝ夕日哉

木 芙蓉

妻戸あけて一枝はねる芙蓉哉  
雨の芙蓉花かたつらになひさけり

木 犀花

雪洞は消えて木犀の匂ひ哉

桐 一葉

金持は悟りのわろし桐一葉

柳 散る

門の柳鳥啼さけり散りにけり  
寺あれて柳ちりこむ古井哉  
大柳散りつくすとも見えざりき  
路ばたの柳ちりけり牛の角  
六朝の塚や夕日の柳散る

水澤公園割煮店

此門や客の出入にちる柳

銀杏落葉

鳶一羽住むや銀杏の葉はらく

紅 葉

日光の空をこがすや夕紅葉  
家あれば菊あり村あれば薄紅葉

二荒を蒔繪にしたる紅葉哉  
古寺に灯のともりたる紅葉哉  
釣鐘を染め残したる紅葉哉  
傘持の火鉢ほしがる紅葉哉  
汽車の窗折々うつる紅葉哉  
人呼ぶや紅葉の宿のきぬかつき  
人もなし紅葉の小橋夕日さす  
女ゆかし紅葉を散らす烟草盆  
紅葉あり夕日の酒屋月の茶屋  
紅葉折て夕日寒がる女哉  
紅葉して錦に埋む家二軒  
瀧の川  
上臈の折たさうなる紅葉哉  
妙義山

夕雲の石門めぐる紅葉哉  
目黒  
夕紅葉客よぶ下女の聲高し  
王子途中  
道々の菊や紅葉や右左  
雅樂協會  
俗人のならびぬ紅葉かざしつゝ  
夕紅葉角あるものは鹿ばかり  
桃の實を籠にもりてや床の上  
桃舟の伏見を出るや二三艘  
羽前國南野  
桃くふや羽黒の山を前にして



栗

いが栗を引きぞわづらふあれ鼠  
老猿の忌日を栗の落ちにけり  
栗のいが鼠の穴をふさぎけり  
栗かじる目黒の下女によばれけり  
墨染にいが栗つかむ松か岡

王子松字亭

栗焼てしづかに話す夕哉

榎 實

野社に子供のたえぬ榎實哉

石 榴

口あけて石榴のたる、軒端哉

柿

音深く熟柿落けり井戸の中  
日もさして雨の小村の熟柿哉

朝 顔

葬や客来てあるじまだ寐たり  
葬や千代萬代の花の種  
葬の入谷豆腐の根岸哉  
めつらしや葬老いて花一つ

入 谷

葬は開く間を賣られけり

漱石来る

葬や君いかめしき文學士

行脚より歸りて

葬に今朝は朝寐の亭主あり

根岸草庵即興(三句)

葬やはなだの上に霧かゝる  
人の家を借りて葬さかせけり  
我夢をめぐつて葬のさかり哉

萩

萩を手に見山下る一人かな  
萩ちるや女机の愚案抄  
はなしては又抱へけり萩の花  
灯きえんとして小窗にそよぐ萩の影  
庭の萩寐て見るやうにたわみけり  
萩の花雀の背にこほれけり  
萩さくや百萬石の大城下  
野萩折て狂女がかざしこれ見よや  
人ぬれて萩の下道月細し  
山駕籠に散りこむ萩の盛哉  
萩を見に行くや彼岸の渡し舟  
萩の中に猶白萩のあはれなり  
白萩のしきりに露をこほしけり  
月に出でて萩の枝折戸押す女

桔

梗

萩に来てはねかへさるゝ雀かな  
はね返し牛行く萩の小道哉  
萩の花くねるとなくてうねりけり  
山萩のしどろに秋を亂れけり  
新井戸にこほれそめけり萩の花

井戸を掘りて

むつかしくつぼむ桔梗の力哉  
一籠のこき紫や桔梗賣  
花籠に荅ばかりの桔梗哉

女郎花

女郎花枝の出るこそわりなけれ  
すよくとこのびて淋しや女郎花  
夕風のもつれそめけり女郎花

草花

鍍著て行き臥す人や女郎花  
女郎花關屋の廁やつれけり  
女郎花昔の人のすがたなり

某妓に代つて某郎に答ふ

女郎花たゞはづかしきばかりなり

草花や人力はしる秋田道  
五文づつに分けて淋しや草の花

雞頭花

裏町は雞頭淋し一くるわ  
雞頭や賤が伏家の唐錦

薄

こゝろみに四五本出たり初尾花  
墓あれて卒塔婆短き尾花哉

順禮の親子出てくる薄哉  
旅人のともに吹かるゝ尾花かな  
人や招く狐の尾花そよぐなり  
舟一つそよぎ出したる薄哉  
夕風に一山なびく薄哉  
實方が馬の尾を吹く薄哉  
牛引て大の男や薄原

得中氏に短冊を贈る時

穂薄を筆に結んで物書かん

墳墓發掘

薄ほるあとのくぼみや小雨ふる

大井村(二句)

少しづつ砂利に取らるゝ薄哉  
ひら尾花物見やしきの跡古りぬ

曼珠沙華

花山だ車しや薄はに似にたる小提灯

阪本祭禮

蘆花

秣もにもならぬあはれや曼珠沙華  
鮭船のへさき並べて蘆の花  
月落て江村蘆の花白し  
引舟の蘆の穂かくれ動く笠

番椒

姑の口裂けもせで唐辛子  
すゝけたる厨の隅や唐辛子

蓼の花

白水の行方や蓼の花盛り

紫菀

淋しさを猶も紫菀ののびるなり

水引車

牛鳴て水引草のさかり哉

野菊

風吹て薄の中の野菊哉  
寺見えて小道の曲る野菊哉  
秋三月咲て淋しき野菊哉

菊

棟上げや家窺々として菊の紋  
歸んなんいさと咲きけり菊の花  
聖天のうしろは淋し菊の花  
蠣殻は垣根に白し菊の花  
里近し酒賣る家の菊の花  
南山にもたれて咲くや菊の花

野分して葎の中の小菊哉  
竹垣や鄰の菊のこぼれ咲く  
嵐雪の黄菊白菊庵貧し  
縁日へ押し出す菊の車かな  
我庵や黄菊白菊それもなし  
繪にかくは黄菊白菊に限りけり  
味噌桶をめぐつて菊の花咲きぬ  
これもうし菊に晴著の黒小袖  
白菊や珊瑚の簪入るべからず  
菊の花我を相手に咲きにけり  
菊の宿昔女のうたひかな  
菊つかむ雀悲しき嵐哉  
菊淋し歌にもならで賤か庭  
菊ばかり花賣の荷の物淋し

菊賣るや十二街頭の塵の中  
菊あれて雞ねらふ鮎かな  
菊買ふや杖頭の錢二百文  
菊や鍬や買ひけり市の夕月夜  
宗因調  
菊時はあきぞ悲しき明梅の  
妙義山  
菊咲かす程の畑あり山の奥  
根岸草庵  
菊の垣犬くゞりだけ折れにけり  
雅樂協會にて東遊舞を見る  
昔めくことこそよしや菊の露  
目黒  
栗飯や下駄ぬぐきはに菊の花

男子をまうけたるを賀して

男なり小菊ながらも白を咲く

王子

百姓の垣に菊あり雞頭あり

天長節

旭に向くや大輪の菊露ながら

同

菊の香や雲井に近き朝朝

重陽

けふの菊御濠の水をのまうよ

蕎麥花

灯ちらく村暮れかねつ蕎麥の花

芭蕉

鄰からともしのうつるはせを哉

芭蕉已に此秋をのびる事五尺  
風吹てさし物裂けるはせを哉

菊南氏住居に鄰れば

芭蕉破れて書讀む君の聲近し

蓮實

蓮の實のこはれ盡して何もなし

烏瓜

螳螂の首くゝりけり烏瓜

稻

稻の穂の伏し重なりし夕日哉  
夜嵐のあとくぼみけり稻籾  
稻の波かぶりて遊ぶ雀かな

聖代

電信に眠る燕や稻の花

稻

刈

掛 稻 に 人 の 影 行 く 夕 日 哉  
掛 稻 の 見 こ し に 遠 き 上 野 哉  
稻 刈 て 近 道 も ど る 牛 の む れ  
早 稻 刈 て 大 黒 笑 ふ 聲 す な り

新

藁

新 藁 や 此 頃 出 來 し 鼠 の 巢

焼

米

焼 米 や 路 通 か 袋 重 げ な り

葛

妙 義 山 (二 句)

白 雲 の 上 に 岩 あ り 葛 紅 葉  
白 雲 や 三 千 丈 の 葛 紅 葉  
葛 の 這 ふ 吉 野 拾 遺 の 名 所 哉

茸

末

枯

相 生 の 松 の 陰 よ り 木 の 子 哉  
平 茸 や 兼 好 す み し 家 の あ と  
松 茸 の 笠 ひ ろ げ た る 日 和 哉  
茸 狩 や 鳥 啼 て 女 淋 し が る  
茸 狩 女 と 知 れ し 木 魂 哉  
末 枯 や 帆 綱 干 し た る 須 磨 の 里  
古 妻 や う ら 枯 時 の 洗 ひ 張

冬

小 春

啞の子の雀追はへる小春かな  
枯枝に雀むらがる小春かな

西新井

鳩眠る屋根や小春の大師堂

初 冬

初冬の家ならびけり須磨の里

霜 月

霜月や山の境の茶の木原  
霜月や内外の宮の行脚僧

冬 日

冬の日途懐の小藪の隅に落ちにけり

寒 さ

冬の日途懐の筆の林に暮れて行く

媒にはしる融の寒さ哉

大名は牡丹のお間の寒さ哉

なきあとに妹が鏡の寒さ哉

素然と牛解く音の寒さ哉

追剝の出てふ松の寒さ哉

寢殿に墓目の音の寒さ哉

うたゝねはさめて背筋の寒さ哉

大海のとりとめ難き寒さ哉

きぬくに念佛申す寒さ哉

入棺の釘の響きや夜ぞ寒さ



うねくと元山寒し三河道  
通されて子牛の穴の鼻寒し  
ほつちりと味噌皿寒し膳の上  
旭のうつる河岸裏寒し角田川

船田

むら雲の劔を拜む寒さ哉

雅俊不犯の鐘うたせたる事を

鐘うてば不犯とひびく寒さ哉

興亭出管

三年の洋服ぬぎし寒さ哉

神戸の鎌倉に寄す

思ひやる都のあとの寒さ哉

鬼の念佛の圖に

枯れ残る角寒げなり鉦の聲

師走

一つ目も三つ目も光る寒さ哉

百鬼夜行の圖

板橋へ荷馬のつゞく師走哉

近道に氷を渡る師走哉

小鼠の行列つゞく師走哉

一休の蛸さげて行く師走哉

婚禮の鳴臺通る師走哉

鳳輦の静かに過ぐる師走哉

悠然と大船かゝる師走哉

竹藪に師走の月の青さ哉

風吹て白き師走の月夜哉

山里の空や師走の風一つ

静かさや師走の奥の智恩院

年内立春

春立て花の氣もなし年の内  
春立て鴉も知らず年の内

大三十日

宮様の門静かなり大三十日  
元日の飾ながらに大三十日  
又三百六十五度の夕日哉  
あすくと言ひつゝ人の寐入けり

春待つ

春待つや小田の雁金首立てゝ

歳暮

年の波世渡りのかちをたえてけり  
居酒屋に今年も暮れて面白や  
老のくれくれくもはやと申しゝに

行く年にのりあふ淀の夜舟哉  
たらちねのあればぞ悲し年の暮  
一年の夢さめかゝる寒さかな  
世の中やこんな事して年の行く  
腫物の血を押し出すや年の暮  
老憎しつもる年波打ては返らず  
一ふりの名刀買ひぬ年の暮  
香煙の美人にもならず年暮れぬ  
王事蹇々装著て年の暮れにけり  
風吹て今年も暮れぬ土佐日記  
天人に舞はせて見ばや年の空  
行く年や雙が岡の歌法師  
行く年を跛の女房静かなり  
行く年を紅粉白粉に京女

冬 雜

さぬくの鴉見にけり嵯峨の冬  
とにかくにをかしき冬の扇哉  
寄席に遊びて

十 夜

薪わりも甥の僧もつ十夜哉  
澁色の袈裟きた僧の十夜哉  
牛も念佛聞くや十夜の戻り道  
鬼婆の角を折たる十夜哉  
鄙人のかしこ過ぎたる十夜哉

神 送 り

風吹て鈴鹿は寒し神送  
裏門はあけたまゝなり神送

達 磨 忌

達磨忌は去年のけふの心哉  
達磨忌やけふ煙草屋の店開き  
達磨忌や更けて熟柿の落つる音  
達磨忌や赤きもの皆吹き落し

爐 開

爐開や暮はいづこの縁の下  
爐開や越の古蓑木曾の笠  
爐開の客もあるじも盲かな

髪 置

髪置や僧になるべき子は持たず

顔 見 せ

顔見せや朔日の月ありやなし  
顔見せや朝霜匂ふ紅の花

冬籠

河豚くはぬ人や芳野の冬籠  
案を拍て鼠驚くや冬籠  
書燈夜更けて雞鳴くや冬籠  
笛一つ釘にかけたり冬籠  
冬籠琴に鼠の足のあと  
冬籠三味線折て爐にくべん  
薪をわる草庵いもうと一人冬籠  
なぞ何とも知れの畫にを解て見せけり冬籠  
炭出しに行けば師走の月夜哉  
荷は置て炭賣見えす寺の門

炭團

書の上に取り落したる炭團哉  
真黒な手鞠出てくる炭團哉

埋火

埋火や木曾に旅寐の相撲取  
只一つ星か螢か埋み火か

櫓

櫓焚くや伊吹を背負ふ一軒家  
櫓火焚て武庫山風來る夜哉  
櫓の火や宿かる家の種子が嶋

火桶

いたいけに童の運ぶ火桶哉  
關守の翠丸あぶる火鉢哉  
番小屋に晝は人なき火鉢哉

巨

燧

妹なくて向ひ淋しき巨燧哉

蒲

團

傾城は瘦せて小さき蒲團哉  
こしらへて見るや蒲團の東山  
重ねても軽きが上の薄蒲團  
寒さうに母の寐たまふ蒲團哉

紙

衣

うき人に見せじ紙衣の袖の皺

十一月二十三日赤坂離宮菊花拜觀を許さる紋付羽織袴

なくて得行かざりければ勤むる人にことわりていひや

りたる其はしに

傳へ來て陶淵明の紙衣哉  
尻やふかん紙衣やぬはん夷紙

頭

巾

頭巾著て飯くふ迄に老いにけり  
市中に落ちあふ妻の頭巾哉  
頭巾著て人大黒に似たる哉

足

袋

律僧の紺足袋穿つ掃除かな  
菊枯て垣に足袋干す日和哉

芭

蕉

菅笠をかぶせて見ばや枯尾花

麥

蒔

麥を蒔く東髪娘京近し  
奈良阪や昔男の麥を蒔く

神

樂

ゆゝしさや内外の宮の神々樂  
篝火に霜うつくしや里神樂

たふとさに寒し神樂の舞少女

庭火 木立枯れて夜半の庭火のあらはなり

亥猪 竈から猫の見て居る亥子哉

吹革祭 大鍋に吹革祭の蜜柑かな

夜興引 夜興引や寺のうしろの葎道

鉢叩 面白う叩け時雨の鉢叩き

京の夜も此頃さびて鉢叩き

飯病中くはぬ腹にひびくや鉢叩き

寒念佛 鳥部野にかゝる聲なり寒念佛

寒念佛京は嵐の夜なりけり  
あの中に鬼やまじらん寒念佛

寒垢離 寒こりや思ひきつたる老の顔

網代 雨の夜や動きもやらず網代守

納豆 納豆の味を達磨に尋ねばや

摺小木に鶯來鳴け納豆汁

玉子酒 狸々を巨燧へ呼ばん玉子酒

藥 喰

豚煮るや上野の嵐さわぐ夜に  
鶯に鍋のぞかせじ薬喰

風 呂 吹

風呂吹や北山嵐さめやすき

駿

あかゞりや京に生れて京の水  
あかゞりのわれる夜半や霜の鐘

雪 車

引きすてた雪車に来て寝る小犬哉

臘 八

臘八や俄かに見ゆる人のやせ  
風吹て師走八日といふ日哉

煤 拂

鼻水の黒きもあはれ煤拂

南無阿彌陀佛の煤も拂ひけり  
牛はいよく黒かれとこそ煤拂  
煤拂のほこりを逃て松の鶴  
煤拂のほこりに曇る伽藍哉  
煤拂鏡かくされし女哉  
來あはした人も煤はく庵哉  
梢から鳥見て居る煤拂  
煤掃て金魚の池の曇り哉

岡 見

煤掃て香たけ我は岡見せん

曆 賣

曆賣侍町の静かなり

衣 配

傾城の紋は何紋衣配り

餅 搗

餅の音虚空にひびく十萬戸

節 季 候

節季候や五條をわたる足拍子  
耳遠し節季候何と申すやら

追 儼

風吹て鬼逃げて行くけはひあり  
大津繪の鬼に豆うつねらひ哉

終 さ す

終さゝん津々浦々の埠頭の先

掛 乞

掛乞を祈りかへすや小山伏

年 木 樵

浅茅生の小野の奥より年木樵

年 の 市

むつかしや六十年の年木樵

賣れ残る奥山松に市の月

昆布さげて人波わくる年の市

明神の鳥居へつゞく年の市

年の市鮭ぬす人を追はへけり

太鼓堂殿

雷神の物買ひにくる年の市

齒 朶 賣

齒朶賣と並んで出たり大原女

年 の 用 意

蓬萊をいろくに飾り直しけり

松立てゝ師走の夕日しづかなり



年仕舞

くそまりつ梳りしつ年仕舞

年忘

言の葉も枯れけり年の忘れ草  
一日は耳や塞がらん年わすれ

時雨

路地口に油こぼすや初しくれ  
初時雨都の友へ状を書く

病中

醫者が来て發句よむなり初時雨  
うちまざれ行くや松風小夜時雨  
縦横に絲瓜一つをしくれけり  
御遷宮一月こえて時雨哉  
しくるゝやいつまで赤き烏瓜

しくるゝや檐より落つる枯あやめ  
しくれうとくして暮れにけり  
寺もなき鐘つき堂の時雨哉  
背戸あけて家鴨よびこむ時雨哉  
首立てゝ家鴨つれたつ時雨哉  
武藏野や夕日の筑波時雨不二  
比枝一つ京と近江の時雨哉  
遠山を二つに分けて日と時雨  
月見えてうそや誠の時雨哉  
塔高し時雨の空の天王寺  
松風に笈の音もしくれけり  
湖や底にしくるゝ星の敷  
廻廊に燈籠の星や小夜時雨  
花火して時雨の雲のうつり哉

夕月のおもて過ぎ行く時雨哉  
花も昔月も昔としくれけり  
生憎に鳥も見えず初時雨  
しくるゝや山こす小鳥幾百羽  
牛つんで渡る小船や夕時雨  
蠣殻の屋根に泣く夜や初時雨  
牛つなぐ酒屋の門の時雨哉  
牛に乗て矢橋へこえん初時雨  
木兎は淋しき晝の時雨哉  
古寺や鮎の顔にしくれけり  
穴熊の耳にしぐるゝ夕哉  
狐火は消えて野寺の朝時雨  
千軍萬馬ひつそりとして小夜時雨  
箱庭の寸馬豆人をしくれけり

しくれては熊野を出る鳥紗  
山鳥の尾を垂れてゐる時雨哉  
しくるゝや雀のさわぐ八重葎  
猿一つ鳶にすがりてしくれけり  
含満や時雨の狸石地藏  
牛むれて歸る小村の時雨哉  
蛸の手の切口見えて夕時雨  
名木の紅梅老て初時雨  
歸り花それも浮世の時雨哉  
杉の葉もしくれて立てり繩簾  
磯時雨花も紅葉もなかりけり  
しくるゝや芋掘るあとの溜り水  
枯蓮のいかに枯れよとしぐるらん  
しくるゝや芳野の山の歸り花

(松風の里は想する  
しぐれ哉嵐雪)

し くるゝや古き都の白牡丹  
し くるゝや石にこぼるゝ青松葉  
水 仙は垣根に青し初時雨  
義 仲を夢見る木曾のしくれ哉  
一 村は靱すりやんで夕時雨  
撒 砂に箒の波や初時雨  
一 時雨京をはつれて通りけり  
古 池やしくるゝ音の夜もすから  
し くるゝや東へ下る白拍子  
名 所は古人の歌にしくれけり  
大 江山鬼の角よりしくれける  
山 城のしくれて明る彦根哉  
い ろくの戀をしくるゝ嵯峨野哉  
灯 かすかに沖は時雨の波の音

松 か岡香の烟にしぐれけり  
し くるゝや旅人細き大井川  
筑 波山かのもこのもの時雨哉  
舟 つなぐ百本杭の時雨哉  
き そひ打つ五山の鐘や夕時雨  
杉 なりの俵の山をしぐれけり  
し くるゝや藜の杖のそまる迄  
桶 の蓋とればしくるゝ豆腐哉  
し くるゝやいづこの御所の牛車  
し くるゝや胡弓もしらぬ坊か妻  
井 戸掘の裸しくるゝ焚火哉  
膳 まはり物淋しさよ夕時雨  
佐 談の蠟燭青し小夜時雨  
露 店の大傘や夕時雨

身にしれと紙衣の穴をしくれけり  
笠塚に笠のいはれをしくれけり  
、頬あてや横にしぐるゝ舟の中  
傾城のうそも上手に小夜時雨  
宗祇去り芭蕉歿して幾時雨  
しくれれたる人の話や四疊半  
雲助の足の毛しげみしくれけり  
化物も淋しかるらん小夜時雨  
泪しぐるゝや色にいでにけり我戀は  
しくれけり菫玉の一むしろ  
しくるゝや熊の手のひら煮る音  
有明の又しくれけり一くらみ  
晝中のあからくとしくれけり  
ふりかへて我身の上の時雨哉

小夜時雨とのゐ申の聲遠し

神戸懐古

しくるゝや平家にならぶ太平記

瀬祭書屋

しくるゝや寫本の上に雨のしみ

旅中

出女の聲にふり出す時雨かな

根岸

鶯のかくれ家見えて初時雨

芭蕉翁二百年忌

月花の愚をしくれけり二百年

風

風や海を流るゝ隅田川  
風や空ものすぎき遠光り

風や星吹きこぼす海の上  
 風や血にさびついた鼠畏  
 風や神馬の齒くきあらはなり  
 風や白菊瘦せて庭の隅  
 風や木曾川落つる夜の音  
 風や浅間の煙吹ききつて  
 風にすこや狂女の花衣  
送風亭  
 風に吹き落されな馬の尻  
訪人不遇  
 風や蟬も榮螺も殻ばかり  
瀬祭書屋  
 物は何風の笠雪の蓑

橋渡る音や霜夜の御所車  
 朝霜や青菜つみ出す三河嶋  
 初霜や兒の手柏の二おもて  
新阪眺望  
 初霜や朝日を含む本願寺  
高山彦九郎畫譜  
 三條の霜に手をつく泪哉  
畫譜  
 古寺や百鬼夜行の霜のあと  
 寒月や海にこぼるゝ玉霰  
 薙刀に寒月高し法師武者  
 冬の雨  
 いろくの時雨は過ぎて冬の雨

冬の雨米つきの裸あはれなり  
聲氷る庭の小鳥や寒の雨

冬の日  
牛部屋や冬の入日の壁の穴

初雪  
初雪や半分氷る諏訪の海

初雪  
灰すて、日に初雪の待たれけり  
初雪や畑より歸る牛の角

雪  
風吹て雪なき空のもの凄し  
ともし火を中にあら野の吹雪哉  
松原の見こしに白し雪の山  
雪の中へ車押し出す御公家町  
惜い事降る程消えて海の雪

寐ころんで牛も雪待つけしき哉  
蓑笠に雪待ち顔の案山子哉  
雪のくれ乾鮭さげて戻りけり  
雪の日や海の上行く鷺一羽  
飛鳥山

雪晴れて筑波我を去ること三尺

雪佛  
掛乞をにらむやうなり雪佛

此下畫に冬籠の墓眠るらん  
讚(雪連麿)

袞  
かたは霞ふるなり鴉の月  
大佛のからくと鳴る霞哉  
有明の霞ふるなり本願寺

枯

野

風吹て 霰 虚空にほどばしる  
りきむ程 猶はね返る 霰哉  
柴漬になぐり こんたる 霰哉

旅人の蜜柑くひ行く 枯野哉  
信長の榎残りて 枯野哉  
里の子の犬引て行く 枯野哉  
一つ家に日の落ちかゝる 枯野哉  
一村は竹縁なる 枯野哉  
ほそくくと三日月光る 枯野哉  
道二つ牛分れ行く 枯野哉  
牛車十程ならぶ 枯野哉  
人妻のぬす人にあふ 枯野哉

冬

田

野は枯れて残りし牛と地蔵哉  
犬吠て 枯野の伽藍月塞し  
狐火や那須の枯野に小雨ふる  
門ばかり残る 冬野の伽藍哉  
牛歸る 枯野のはてや家一つ  
ゆらくと立つや 冬野の女郎花  
何うらむさまか 枯野の女郎花

幽霊畫談

氷

刈あとの株に海苔つく 冬田哉  
いなむらの崩れて黒き 冬田哉  
雁落ちて 冬田に崩す 一文字  
田鼠のはしる音あり 初氷

氷

柱

馬渡るかたや湖水の初氷  
浮くや金魚唐紅の薄氷  
諏訪の海女もわたる氷哉  
白鷺の片足あげる氷哉  
播鉢を手水鉢におろして  
水鉢の氷をたく播木哉

大佛の鼻水たらす氷柱哉  
つらゝして轆轤の牽絶えにけり

千

鳥

散ると見てあつまる風の千鳥哉  
渺々と何もなき江の千鳥哉  
關守の廁へ通ふ千鳥哉

鴨

牛のつらに崩るゝ間の千鳥哉  
船に積む牛のさわぎや小夜千鳥  
新田や牛に追はれて立つ千鳥  
登が家や行燈の裏に鳴く千鳥

竹藪の裏は鴨鳴く入江哉  
鴨啼て小鍋を洗ふ入江哉  
一つ家に鴨の毛むしる夕哉

鶯

鶯

薄雪にふられて居るや鶯一つ  
あはれなり死でも鶯の一つがひ

浮

寐

鳥

朝見れば吹きよせられて浮寐鳥



鳩

かいつぶり思はぬ方に浮て出る

冬の蜂

人をさす劍はさびて冬の蜂

鷹

渡りかけて鷹舞ふ阿波の鳴門哉  
据て行く鷹の目すごし市の中  
鷹それて夕日吹きちる嵐哉

暖鳥

うつかりと放すまじきか暖鳥

河豚

我をにらむ達磨の顔や河豚汁  
鯨提げて歸るや市の小夜嵐  
鯨に似た顔と知らずや坊が妻  
鯨くけふや獣うそむく裏の山

風吹て鈍くふ夜のさわがしき  
風吹て河豚を隠す袂かな

海鼠

平鉢に氷りついたる海鼠哉  
空死と見えであはれな海鼠哉  
海鼠出る頃を隠れて鼠鼠

中納言師時法師をたしなむ

海鼠とも見えで中々あはれなり

童 讀

海老は鎧海鼠の裸を笑つて曰く

鯨

小嶋かと思れば汐吹く鯨哉

棒

節

棒節を引すつて行く内儀哉

鶯子啼

さゝ、鳴や張笠乾く竹の垣

落葉

夜嵐やどこの落葉を鳩の海  
干網に吹きためられし落葉哉  
月寒し木葉衣を風わたる  
湖の上に舞ひ行く落葉哉  
徳利提げて巫女歸り行く落葉哉  
縁に干す蒲團の上の落葉哉  
弓杖に人の竹む落葉哉  
大寺の屋根にしづまる落葉哉  
鼓うてば木の葉散るなり能舞臺  
根岸草庵  
三尺の庭に上野の落葉かな

紅葉散る

上野公園  
落葉掃く腰掛茶屋の女哉

芭蕉像讚

寒ければ木の葉衣をまゐらせん

かけ橋や今日の日和を散る紅葉

釣鐘に紅葉の畫讚

散る紅葉女戒を犯す法師あり

冬木立

犬吠て里遠からず冬木立  
産神や石の鳥居も冬木立  
野の宮の鳥居も冬の木立哉  
山陰や村の境の冬木立  
村もあり酒屋もありて冬木立

ひか 宮 と神の鏡や冬木立

沖中や鳥居一つの冬木立

毒老人讚

其杖も男鹿の角も冬木立

茶の花

茶の花の茶の葉あるこそ恨みなれ  
庭下駄に茶の花摘まん霜日和  
茶の花や霜にさびたる銀閣寺

枯柳

井戸のぞく子供も居らず枯柳  
枯柳相如が題字古りにけり

歸花

入相の鐘に開くか歸り花

寒梅

藏陰に雀鳴くなり歸り花  
歸り花比丘の比丘尼をとふ日哉

日の筋の一つ二つは寒の梅  
寒梅や焚き物盡きて琴一つ

山茶花

山茶花の縁にこぼるゝ日和哉  
山茶花や石燈籠の鳥の糞

寒椿

寒椿力を入れて赤を咲く  
年中の明家なりけり冬椿  
寒椿落ちて氷るや手水鉢

枯薄

うしろから吹く風多し枯薄

枯芭蕉

枯尾花姥のやうにて恐ろしき  
狼のふみゆく音や枯尾花  
尾花枯て砂利ほる丘に鶉鳴く  
尾花枯て石あらはるゝ箱根山  
木魚と鼓と三味線とをかきたる晝に  
世の中を悟つて枯れる薄哉  
戀塚や薄は枯れて牛の糞  
芭蕉枯れんとして其音かしましき

枯蓮

蓮枯て夕榮うつる湖水哉  
蓮枯て辨天堂の破風赤し  
不忍池(二句)  
長恨歌

枯蘆

太液の枯蓮未央の枯柳

枯蘆の中に火を焚く小船哉  
枯蘆や沼地つゞきの薄氷

枯蕙

からみつく枯蕙長し牛の角

水仙

水仙や紫楸紗黒茶碗  
水仙や根から花さく鉢の中  
枯れはてしおどろが下や水仙花

類祭書屋  
古書幾巻水仙もなし床の上

冬牡丹

誰がすんで京のはづれの冬牡丹

冬牡丹江口の君の姿かな

寒菊の日和待ちける苔哉

枯菊枯て筆塚淋し寺の庭

室咲見せよト師

冬枯や柿をくはへて飛ぶ鴉

冬枯や酒蔵赤き村はづれ

冬枯や賤が檐端の烏瓜

冬枯や繪の嶋山の貝屏風

冬枯や雜木の奥の松林

易の占ひして金取り出しける事を

冬枯や逡巡に吠ゆる里の犬

冬枯に犬の追ひ出す鳥哉

冬枯にうら紫の萬年青哉

冬枯の垣根に咲くや薔薇の花

冬枯の木間に青し電氣燈

冬枯の一隅青し三河嶋

冬枯をのがれぬ庵の小庭哉

辻君の衾枯れたる木陰哉

蕪引よつ引てひようとぞ放す大蕪

大根引夕月に大根洗ふ流かな

紙燭とつて大根洗ふ小川哉

大根引く音聞きに出ん夕月夜

葱

練馬道大根引くべき日和哉  
葱洗ふ浪人の娘瘦せにけり  
白葱の一皿寒し牛の肉

新

年

明治二十七年甲午年

紀元二千五百五十四年なり  
ほのくと茜の中や今朝の不二  
禪僧の寂然として今朝の  
白し青し相生の筑波けさの春  
春や來る表に物も案内も  
百卷の古書の山こえ春は來ぬ  
父母います人たれくそ花の春  
盆栽の紅梅さくや女御の春  
猫の子の眷族ふえて玉の春  
淋しさの尊さまさる神の春

元日

君が春さゝれ石原玉かしは

蓬菜

三寶に東海南山庵の春

草庵

掃溜にこれはくの春も来し

新聞記者となりし身の元日より筆をとりそめて覺束なくも

むつかしき言の葉草や花の春

根岸

鶯の鄰にすんで今朝の春

灯を消して元日と申す庵哉

うつくしや洛陽の元日雪ちらく

元日の雀鳴くなり手水鉢

元日や二十六年同じこと

正月

松の内裏門や遣羽子はやる松の内

元日もたとゝ尊さの涙かな

太神宮

元旦の夕日になれば哀れなり

元旦に追つかれけり破袂

元日の住吉淋し松の音

元日を御濠の鷗とも知らず

元日や都の宿の置巨燧

元日の芳野に花もなかりけり

元日や何やら語る鶴四五羽

琴鼓ならべかけたる睦月哉

東	初	初	初	初	立
風	雞	鴉	日	空	春
桶	初雞の枕の上 <small>田舎</small> にうたひける	初鴉不二か筑波かそれかあらぬ古妻のいきたなしとや初鴉	鴉一羽初日の中を通りけり	初空へつゝとのべけり鶴の首	春立つや晝の灯暗き山やしろ

蓬	飾	蓬	菜
蓬菜に似たり小窗の松の山	女つれて東風に吹かれに東山馬の耳立てゝ東風吹くあした哉	蓬菜に橙の朝日昇りけり	蓬菜や南山の蜜柑東海の鰕
丹清老に寄す	ふじのねや籠は三保の松飾	蓬菜の山も動かぬ代なりけり	蓬菜の羽蓬菜鶴の如くなり
	めでたさや飾の蜜柑盗まれて	大内は蓬菜山の姿かな	
	明家や門松の齒抜面白き		



飄亭の故郷に在るに寄す

君か家は蓬萊橋をかざし哉

福菓 福菓に雀の下りる日向かな

串柿 父母妻子串柿のごと並びけり

四方拜 四方拜其時朝日のぼりつゝ

禮者 輪かざりに標札探る禮者かな

雜煮 旅人の雜煮喰うたる鞠子哉

三碗の雜煮喰ひぬ小傾城  
七碗の雜煮くひけり梅の花

大 磯

膳の上に繪の嶋のせて雜煮哉

屠蘇 屠蘇かけて見ばや枯木の梅の枝

田作り 田つくりや庵の肴も海のもの

野老 海老野老草庵のあるじ愚老といふ

嫁か君 さゝやくは誰そ小殿原嫁か君

嫁か君の通ひ路多し破障子

初荷 牛引の初荷の山よ人の波

初 曆 人の手にはや古りそめぬ初曆  
 謠 初 草の戸や雑煮の腹の謠初  
 弓 始 君が代や鳥驚かぬ弓はじめ  
 書 初 年玉や上の一字を筆はじめ  
 著衣始 名所や絹商人の著衣始  
 馬乗初 紙衣あり庵いかめしき著衣始  
 乗そめの足も亂れず雪のあと

舟乗初 乗そめや恵方参りの渡し舟  
 初 夢 はつ夢や吉野龍田の花盛  
 齒 固 齒固やいで海のもの山のもの  
 若 餅 若餅や草津の里の姥が軒  
 遣羽子 遣羽子や皆君が代の女ぶり  
 遣羽子や下宿の窓の品定め  
 遣羽子や京の六條珠數屋町  
 遣羽子のちらく雪となりにけり  
 遣羽子に京の男のやさしさよ

手鞠

神國の女を

目の黒い人に生れて手鞠哉

傀儡師

傀儡師梅の花道歩み來る

猿曳

猿引や猿のきよろつく日本橋

鳥追

鳥追や夕日に下る九段阪  
鳥追のあとから笑ふ雀かな

萬歳

萬歳に見つけられけり草の庵  
萬歳や四條を戻る夕日影

水祝

大君の來ませ御肴水祝ひ  
嫁つれて鼠も出たり水祝ひ

薺打つ

君か代の薺をはやす拍子哉

子の日

春日野の子の日に出たり六歌仙  
引かんとや小松かくれの耕の袴  
小松かくれ鶴の子見ゆる子の日哉

福壽草

南山をかざすや窗の福壽草

初めの冬

寒

のら猫をかゝへて寐たる寒さ哉  
狐火の湖水にうつる寒さ哉  
天暗うして大佛の眼の寒さ哉  
人一人二人寒しや大廣間  
古城の石かけ崩す寒さ哉  
むさゝびの石弓渡る寒さ哉  
星落ちて石となる夜の寒さ哉  
吉原の裏道寒し卵塔場  
日のあたる石にさはればつめたさよ

演劇夢結縁に鳥退

炭

大名をゆすりにかゝる寒さ哉

炭賣の休むか粉炭石の上  
猿殿の小便くさしいぶり炭

火

鉢

古寺に火鉢大きし臺所  
傾城の足音更ける火鉢哉  
とりまくやとのゐする夜の大火鉢

湯

婆

大佛の麓に寐たる湯婆哉

埋

火

おらが在所は埋火の名所哉

蒲

團

灯を消せば蒲團走るや大鼠

雲 紙 納 頭 髪

衣 豆 巾 置

毛蒲團の上を走るや大鼠  
 髪置や總領の甚六にて候  
 頭巾ぬげば皆坊主でもなかりけり  
 禪僧や佛を賣て納豆汁  
 納豆汁ト傳流の翁かな  
 飼犬に袖ひかれたる紙衣哉  
 湖青し雪の山々鳥歸る  
 蛸隠す夜の吹雪の小菘かな  
 雪の山壁の崩れに見ゆる哉

霜 雲 雲

千年の大寺一つ雪野かな  
 引沙や薄雪つもる沖の石  
 寺一つむつくりとして雪の原  
 八陣の石崩れたる叢哉  
 大粒の霰降るなり石疊  
 猿の橋杭つたふみ水ぞれ哉  
 人もなし黒木の鳥居爰ふる  
 朝霜や雫したゝる塔の屋根  
 辻堂に狐の寐たる霜夜かな  
 霜柱石燈籠は倒れけり

冬 月

門くづれて仁王裸に冬の月  
辻番のともし火青し冬の月

氷

さゆる夜の氷をはしる磯かな  
蘆の根のしつかり氷る入江哉  
佛立つ大磐石の氷柱哉

ある大名邸の跡にて

金魚死して涸れ残る水の氷哉

枯 野

女狐の石になつたる枯野哉  
大木の雲に聳ゆる枯野哉  
貝塚に石器を拾ふ冬野哉

鶴 輪

澤庵の石に上るやみそさしい

千 鳥

おゝ寒い寒いといへば鳴く千鳥  
かたまつておろす千鳥や沖の石

海 鼠

貞女石に化す悪女海鼠に化すやらん  
大海鼠覺束なさの姿かな

河 豚

大鈍や思ひきつたる人の顔  
釣り上げて河豚投げつける石の上

冬 木 立

立石や道折り曲る冬木立  
大庭や落葉もなしに冬木立

村居を訪ふ

冬木立隠士が家の見ゆる哉

寒 梅 寒 梅 や 欄 干 低 く 筑 波 山

枯 薄 芒 枯 れ て 千 年 の 野 狐 石 に 化 す

加賀邸の跡にて

花 薄 百 萬 石 を 枯 れ に け り

枯 草 草 枯 れ て 礎 残 る あ ら 野 哉

草 枯 れ て 池 の 家 鴨 の 寒 げ な り

冬 枯 冬 枯 や 鳥 に 石 打 つ 童 あ り

冬 枯 の 築 山 淋 し 石 燈 籠

冬 枯 や 大 き な 鳥 の 飛 ん で 行 く

冬 枯 や 王 子 の 道 の 稻 荷 鮎

根岸草庵

冬 枯 や 鄰 へ つ ぐ 庵 の 庭

水 仙 宗 匠 が 床 の 水 仙 咲 き に け り

百 兩 の 石 は 小 さ し 水 仙 花

枯 薦 枯 薦 や 石 に つ ま づ く 宇 津 の 山

葱 指 五 本 葱 の 雫 落 る べ う

美女讀

春

餘 寒

夕ぐれの風になりたる餘寒哉  
濁酒の頭に上る餘寒哉  
日影薄く梅の野茶屋の寒さ哉  
鍛冶か火に梅ちりかゝる餘寒哉  
馬立てゝ勿來の關の餘寒哉  
唐船の此頃よらぬ餘寒哉

鐵眼奥州より歸りしに

陸奥を出てまだ江戸の春寒し

長 閑

大佛のうしろ姿も長閑なり

暁

暖

二

月

のとかさや鐘つき山を上る見ゆ  
のとかさや内海川の如くなり  
長閑さや干潟の石の鶴一羽  
のとかさや麥の畑の爪上り  
うらゝかや氷の解けし諏訪の湖  
あたゝかに立上る船の煙かな  
きさらぎの笈摺赤し子順禮  
一村の梅咲きこぞる二月哉  
梅檀のほろく落る二月哉  
旅人の八重山こゆる二月哉  
大佛の胴中まはる二月哉



三月

大砲を海へうちこむ二月哉  
葉ののびて獨活の木になる二月哉

辻堂に繪馬のふえたる彌生哉

寶生新朝の谷行を見て

三月を此能故に冴え返る

悼

三月をえらんで人の死なれける

西新井大師

法界平等鳩も餌に飽く彌生哉

春日

女若く馬糞ひろふ春日哉

蜚の子の足に波うつ春日哉

雨霽れて鳥啼く塔の春日哉

日永

鐘子さげて畑より戻る春日哉  
小舟漕で大船めぐる春日哉  
大木の下に子のよる春日哉  
聖代  
鳳凰のしだり尾ゆらく春日哉

雨一日二日山家の暮遅し  
馬方と一つ床几の日永哉  
吹て消えて石輪の玉の日永哉  
龜の子の鹽這ひ出る日永哉  
順禮の乳しぼり出す日永哉  
女つれて中川つたひ日永哉  
百人の人夫土掘る日永哉  
牛に乗つて鮎買ひに行く日永哉

春

夕

永き日の滋賀の山越湖見えて  
 病人の仰向になる日永哉  
 永き日の村まだ遠し馬の足  
 乞食寐る橋の袂の日永哉  
 金毘羅に大繪馬あげる日永哉  
 引きすてし大鋸の日永哉  
 永き日の蘆か鳥か塔の尖  
 柁を絶えて船流れよる日永哉  
 水上は花絶えて日の永さ哉  
 面白い事ばかり春の夕哉  
 宮嶋や春の夕波うねり來る  
 影長し春の夕日の大草鞋

畫讀

春

夜

永代や春の夕日の橋の影  
 花見寺  
 踊るかな春の夕日の影法師  
 春の夜や重ねかけたる緋の袴  
 春の夜の石壇上るともし哉  
 春の夜のともし火赤し金屏風  
 何事のなしに春の夜面白き  
 春の夜や傾城買ひに小提灯  
 春の夜の妹が行けば小雨ふる  
 琵琶やんで小窓に春の夜更けたり  
 春の夜を語れ式部も小式部も  
 春の夜や朗詠うたふ舟の中

目黒

暮 春  
夜

春の夜のうたゝね更けぬ牡丹亭  
王子松字亭  
春の夜を稻荷に鄰るともし哉

臘夜の饒湯匂ふ小村哉

行春を女車の人もなし  
行春を豊の乞食あはれなり  
行春を惜むや平家物語  
行春を乗合船の女かな  
行春の石ともならで尼一人  
行春の魚のはらわた腐りけり  
行春の瓜紅落す女かな  
行春に手をひろげたる巖哉

春 雑

御座船や須磨を離るゝ春の暮  
浅草に鴉啼くなり春の暮  
錦帳に春暮れて行く色紙哉  
題 晝(三句)  
行春の紅はげる野山かな  
鳥の聲春は緑に暮れて行く  
緑青の八重山かくれ春の行く  
龜井戸と題せる晝に藤の花の一房二房と玩具の猿など  
釣り下げたる晝をかきしに  
暮れて行く春をぶらりと下りけり  
春はものゝ餘りに人のうとましき  
いつまでか春の枯木の古草鞋  
僧や俗や春の山寺碁を圍む

風

焼石や春の裾山草もなし  
 繪の嶋や石も五色の花盛  
 雞鳴くや椿の垣根梅の門  
 桃柳櫻の中を蜺賣  
根岸  
 紅梅も菜種もさくや門の中  
 春の人このもかのもとに見ゆる哉  
 切れ風やふはりくと沖の方  
 大風や伽藍の屋根に人の聲  
 夕まぐれ風賣る家の嵐かな  
 切風や中國さして飛んで行く  
 雨晴れて一本板風高し

養父入

大風や梯子に並ぶ庭の隅  
 電信や絲のたよりのかゝり風  
 風高し鏡が浦は眞ッ平  
掉  
 切れ風の切れて歸らぬ行へ哉

出代

やぶ入の人ばかりなり淺草寺  
 藪入の祇園清水清閑寺  
 煎餅賣る門をやぶ入の通りけり  
 出代の便船たのむ潮來哉  
 大幅の帯結びけり出代女

涅槃會

足もとに雲もゐるなり涅槃像

彼岸

鉦も打たで三味を彼岸の乞食哉  
うき人よ彼岸参りの薄化粧  
草臥はせぬか彼岸の鉦叩き  
珠數ひろふ人や彼岸の天王寺  
乞食も乗るや彼岸の渡し船  
ほろく<sup>と</sup>椿こぼるゝ彼岸哉  
順禮と泊り合せる彼岸哉  
鉦叩く乞食坊主の彼岸哉  
初午の福宜と女と渡し船  
山一つこえて畑打つ翁かな  
子を負うてひとり畑うつやもめ哉

初午  
畑打

種蒔

種まきや狩出したる泥鼠  
干大根 年々や婆が手瘦せて干大根  
接木 あこがれて寐るや接木の夜の雨

驚寒しまだ耕さぬ畑のくろ  
武藏野や畑打ち廣げく  
牛のせて畑打ちに行く小舟哉  
奈良阪や鹿追ひのけて畠打つ  
汽車道の左右に畑打つ夫婦哉  
畠打つ大原山の男かな  
畑うつや石すゑ起す城の跡  
武藏野や畑打つ女帯赤し

爐 塞

爐塞いで疊の海に波もなし  
爐塞で種芋植ゑんとぞ思ふ  
爐塞で足に鼠を追ふ夜かな

雛

面白い事して雛の一夜かな  
雛立てゝ人待つ夜のけしき哉

草 餅

大佛に草餅あげて戻りけり

桃 酒

薄赤き顔並びけり桃の酒

汐 干 狩

振袖を背中に結ぶ汐干哉

茶 摘

木隠れて手拭赤き茶摘哉

人も見ず山の凹みの茶摘歌

春 風

春風や侍町の枕賣  
春風や馬糞車引けよとて  
春風や横町々々の赤鳥居  
春風や郵便車の肥車  
春風や四階五階の貸座敷  
春風や田舎の娘我を見る  
春風や木の間に青き耶蘇の寺  
春風や五反帆川をさかのぼる  
春風や木の間に赤き寺一つ  
春風や大紋そろふ男山  
春風や石に字を書く旅硯

春風や森のはづれの天王寺  
春風や永代橋の人通り  
春風の辻堂めの字く哉  
油揚に羽が生えたり春の風  
古川や鯉泡吹く春の風  
薄絹に鴛鴦縫ふや春の風  
大江戸や錦繪を吹く春の風  
六郷の橋まで來たり春の風  
橋ぎはや帆を下したる春の風  
海見ゆる町のはづれや春の風  
三重に白帆かけたり春の風  
鳩鳴くや大提灯の春の風  
六國の印章重し春の風

神武天皇祭

日の旗や四階五階の春の風

谷中

そよくと杉の間より春の風

牡丹裁て美人土かふ春の風

風船賣畫譜

昇天の夢や見るらん春の風

上野の入口

春風や大風車小風船

京都

春風や山紫に水青し

千住

春風や青物市の跡廣し

隅田川

霞 殘 霜

雲 解

春風や鳥居の笠木帆掛船

燈橋新造

春風や威しかへたる鎧橋

畫 讀

岩間より春風の里見ゆる哉

上の方にばかり鳥の飛びたるかたに

旅人の上向いて行く春の風

霜解や杭にふるふ下駄の土

武藏野を圍む山々雪残る

品川の霞んで遠き入江哉  
鼻先の富士も箱根も霞みけり

木の間に紙すく小村霞みけり  
大佛の横顔かすむ夕哉  
霞みけり山一番の大檜  
沖中の白石かすむ日和哉  
狸棲む一本榎かすみけり  
山のへや霞一の字水くの字  
霞む日や屋根ばかりなる本願寺  
根 岸

薄緑お行の松は霞みけり  
送 別

行く人の霞になつてしまひけり  
上野臺眺望

鳶一つ都のはてに霞みけり



陽炎

馬糞の陽炎になつてしまひけり  
逃水の逃て陽炎燃えにけり  
陽炎やはじけてひぞる鹽煎餅  
雨晴れて雞陽炎の土を掘る  
陽炎や土に埋もる力石

犬山道節火定の古跡を戯れに尋ねて

ないものゝ有て陽炎燃えにけり

玩具の人形のぶらさがりたる畫に

陽炎のひねもす動くあちこちと

春月

生酔の鄰たゝくや春の月  
女負うて川渡りけり朧月  
奈良の町の昔くさしや朧月  
春月や五條橋上の大軒

春雨

兵船の笛吹きやみぬ朧月

播鉢をかぶつて行くや春の雨  
春雨の土塀にとまる鳥かな  
春雨の築地にむるゝ雀哉  
春の雨播鉢買うて戻りけり  
傘さして筑波見に出ん春の雨  
春雨や檻に寐ねたる大狸  
石投げて濠の深さを春の雨  
泥舟や三艘ならぶ春の雨  
人もなし鶯横町春の雨

別霜

別れ霜庭はく男老にけり

春日

入相の山むらさきに春日かな

水温む

禰宜渡る水のぬるみや紙屋川  
御手洗の水ぬるみけり男山  
蛇の渡るや沼の水ぬるむ

春水

春の水背戸の小川を流れけり  
馬引て渡る女や春の水  
春の水石をめぐりて流れけり  
さゝやかな舟浮かしけり春の水  
背を見せて魚泳ぐ春の水浅し

春川

土橋あり肥船つとふ春の川

春海

あちへ舟こちへ此橋春の川  
驛見えて芥流るゝ春の川  
何染めて紅流す春の川  
裏口や白帆の通る春の川

焼野

二位の尼泣く夜や春の海あるゝ  
きのふも焼けふも春日野焼にけり  
焼残る廣野の中の地藏哉  
そぼふるや焼野の石に雀啼く

焼山

三日三夜草山一つ焼にけり

春野

春の野に都見かへる女かな

春

山

春の野や何に人行き人歸る  
女つれて春の野ありき日は暮れぬ

山

笑

家ありや牛引き歸る春の山  
戀かあらぬ春の山ふみ酔ひ心  
真先に女行くなり春の山

汐

干

大船の真向に居る汐干哉  
龍宮の鐘聞えたる汐干哉  
船底を蟹這ひ上る汐干かな

のどかさに耳なし山も笑ひけり  
蒲團著て笑ふ姿や東山

鶯

鶯やしんかんとして南禪寺  
鶯や枯木の軒家  
鶯や女車の加茂詣  
鶯や小藪の中に寺一つ  
鶯や團子くひ行くうつの山  
鶯や輕石さげて風呂戻り  
鶯の尻のす見たり檐の梅  
鶯の飛で出でけり笹の中  
鶯の梅嶋村に笠買はん  
鶯の小村より菜をつんで來る  
鶯にわがくふだけの鳥哉  
啼きやめて鶯逃げぬ垣の外  
鶯や梅の湯戻り五六町

根岸

勅なるぞ深山鶯はや來鳴け

猫戀

巨燧の山流しの川や猫の戀

猫迷ふ戀の關路や牛の角

我戀のかくても猫に劣りけん

大猫の戀にやつるゝあはれさよ

猫の戀大長刀をわたりけり

うき人に石投げらるゝ猫の戀

鳥歸

今朝も雁歸りけり雁歸りけり

鳥歸

海原や一むれづつの鳥歸る

燕

馬の尾やひらりとかはす乙鳥

淺草の本堂めぐる乙鳥哉

大佛につきあたりたる燕哉

大橋の長さをはかる乙鳥哉

燕やくねりて長き千住道

燕や千住女郎をなぶり行く

雲雀

雀

鳥さしを見下して居る雲雀哉

吹かるゝや鳴門の上の舞雲雀

新田にたまさかあがる雲雀哉

雉

山道や人去て雉あらはるゝ

折々に雉子飛び立つ廣野哉

雉の尾や葎に隠れ松に見え

呼子鳥

うしろから前から我を呼子鳥

麥 鶉

麥一畝<sup>アキ</sup>二うね鶉三四聲

たま〜くに鶉なくなり麥鳥

雀 巢

人も來ず神殿古りて雀の巢  
雀の巢産婆の櫓は傾きぬ

鷹 巢

鷹の巢の下をつゝくやてらつゝき

蛙

翠帳に御池の蛙聞く夜かな  
夕月や田舟めぐつて鳴く蛙  
田四五反蛙になつてしまひけり

田 螺

聲高に瘦田の水の蛙哉  
溝川の澄で中行く蛙かな  
泥すみて影の動かぬ蛙かな  
捨舟をめぐつて蛙鳴く夜かな

鶴下りて背戸の田螺をあさりける  
雨晴れて夕月の缺を鳴く田螺

蛇 出 穴

穴を出て古石垣の蛇細し

白 魚

三日の月白魚生るゝ頃ならん  
白魚瘦せて網の目もるゝわりなさよ

櫻 鯛

板の間にはねけり須磨の櫻鯛

洛陽の水に浮きけり櫻鯛

春魚 藻かくれや春の小魚のちらくくと

古沼の芥に春の小魚かな

飯銷の大地をつかんで死る哉

蝶 人の背に蝶々なぶる小猿哉

蝶々や旅人になつて見たく思ふ

水鉢の水のみに來る胡蝶哉

蝶追ふや旅人餅を喰ひながら

並松に人もなし胡蝶ひらりく

大橋の裏に蝶飛ぶ日和哉

船橋のふはく動く胡蝶哉

二重橋

蝶ひらく御橋の裏に朝日さす

蜂一つ穴を尋ねて竹格子

釣鐘を蹴落さんと虹の飛びめぐる

山里は蠶飼ふなり花盛

梅

梅さくや納豆を霧ぐ法師あり

詩僧あり酒僧あり梅の園城寺

垣つゞき梅さく横町々々哉

梅咲くや黒板塀の曲り角

鍋提げて梅折る里の女かな  
袴ぬいで梅の日曜土曜かな  
松青く梅白し誰が柴の戸ぞ  
板塀や梅の根岸の幾曲り  
梅咲くや瑞光殿の鈴の音  
梅を見て野を見て行きぬ草加迄  
鳥居より三町奥や梅の花  
梅さくや水をめぐらす人家幾村々  
鱒くふや草加の宿の梅の花  
いたづらに梅老いけりな藪の中  
梅咲て仁王の面の赤さかな  
梅咲くや普請出来たる大師堂  
何といふ寺とは知らず梅の花  
道狭く梅さげて行く女あり

野の道や梅から梅へ六阿彌陀  
門ありて梅あり玄關はるかなり  
山寺の大搦鉢や梅の花  
大城の郭残りて梅の花  
奥山や屋根に石おく梅の花  
瓢箪の看板は何梅の花  
二月一日徙移に

梅さくや本箱荷ふ破れ袴

弘道館

古書千卷文質彬々として梅の花

臥龍梅

龍老てのど首に梅の二三輪

草庵

根岸にて梅なき宿と尋ね來よ

助 人

こゝちやある家あり梅も咲て居る

弘道館

梅の花寒水石の寒さかな

根 岸(二包)

梅さくや竹垣杉垣小柴垣

家五百ことく梅咲きにけり

鳴雪翁とつれだちて行きけるに翁は梅見にまかるとて

道より別れければ

右へ町左へ梅の別れかな

夜 梅 梅か香に一村こもる月夜哉

梅 散 夕月や梅ちりかゝる琴の上  
梅 散 るや山の井をくむ人もなし

紅 梅

溝川に梅散りかゝる家鳴哉  
梅散て苔なき庭の夕寒し  
梅ちるや一寸程の魚躍る  
僧の坐す石ひやゝかに野梅散る  
鎌倉や野梅ちる日に我來たり  
梅散て又大佛の寒げなり

紅筆に薄紅梅を染めて見ん  
紅梅や翠簾をこぼる、緋の袴  
雪ちらく薄紅梅の妻戸哉  
梅の中に紅梅さくや上根岸  
紅梅や一町奥に薬王寺  
紅梅のかなた爪琴こなた笛



土手一里依々戀々と柳哉  
 浅妻の烏帽子をなでる柳哉  
 大川に女船漕ぐ柳哉  
 夕煙柳かくれの小寺かな  
 高殿に美人佇む柳かな  
 柳あり橋あり風の酒旗翻々  
 史家村の入口見ゆる柳かな  
 柳遠く人家の烟搖曳す  
 眞直に堀割遠き柳かな  
 柳わけて居酒屋の門はひりけり  
 柳青し紅燈七十二青樓  
 酒船をつなぎとめたる柳哉  
 居留地の街正しき柳哉  
 大江戸は八百八町の柳哉

馬車柳大路のひろさ哉  
 大柳小橋あるべきところかな  
 石文の上にしだるゝ柳かな  
 町中を小川流るゝ柳かな  
 岸  
 この邊は名もなき家の柳哉  
 不忍鼓馬  
 馬の尾の東になびく柳哉  
 草と見え柳と見えて村遠し  
 梅柳川に臨みて誰が樓ぞ  
 そぼふるや黒木の烏居木の芽ふく

椿

何の木としらで芽を吹く垣根哉  
つぶくと芽をふいて居る老木哉  
しをらしき老木の株の木の芽哉  
切口の播鉢とれば木の芽哉  
木の芽ふいてうこぎ長屋の人もなし

ふり落し椿はくなり庭男

鳥の聲一樹に深き椿哉

文机に白玉椿こぼれけり

廣前や小石の上の落椿

常磐木の林の中や赤椿

兀として坊主椿の花一つ

松

花

沙風や羽衣の松花ささきぬ

花も咲かで須磨の濱松老にけり

李

花

山里は李さく頃の寒さ哉

木

蓮花

木蓮の花一齊に開きけり

梨

花

有明のきえくに梨の花淋し

家買うて妾抱へぬ梨の花

海

棠

海棠や雪洞消えて人の聲

海棠の雫にそだつ金魚かな

紙燭取て女海棠に立てりけり

桃

花

から尻に夫婦のりけり桃の花

初  
櫻

桃咲くや可愛いと  
思ふ女あり  
鍋提げて桃の中  
道妻歸る  
人載せて牛載せて  
桃の渡し哉  
てらくと桃の中  
なり幾個村  
路はたに桃の花  
咲く小村かな  
草屋二軒赤白の  
桃咲ける哉  
桃咲くや妻にな  
る人誰々そ  
橋こえて桃の小  
村へいそぐ哉  
魚浮くや桃の小  
川の水よどみ  
村童の異人にた  
かる桃の花  
雞鳴て村静かな  
り桃の花  
これはくあちら  
こちらの初櫻

櫻  
花

花一木こゝも乞食  
の叩き鉦  
花の寺濁酒賣の  
這入り  
山櫻いくさのあと  
と思はれず  
花の雲王城細く  
見ゆる哉  
花の雲鐘つき堂  
は埋れぬ  
櫻咲て白粉賣や  
紅粉賣や  
花の山浮世繪の  
美人來る哉  
大櫻只一ものさ  
かり哉  
井戸端の秋色櫻  
零せよ  
観音の大悲の櫻  
咲きにけり  
嶋原の一本櫻古  
りにけり  
氣安さや花から  
花へ旅乞食  
鳳輦の櫻の上  
に見ゆるかな  
明寺や花咲て  
人往來す

江戸入りや花の中行く大鳥毛  
山ぞひや花の根岸の一くるわ  
海見ゆる櫻の中の床几哉  
何見るそ櫻の茶屋の遠眼鏡  
雲助の博奕うつなり山櫻  
綺麗のがぞろりくと花の山  
屋の棟の五重にたゝむ櫻哉  
炭竈のつめたき頃や山櫻  
何者が死んで此墓此櫻  
妻つれて妾つれて人の花見哉  
黒門を出れば這入れば櫻哉  
大佛の膝にかゝるや花の雲  
大臣の別荘赤き櫻かな

此花がいやちやくと死なれけん  
悼 靜 溪 叟  
其まゝに花を見た目を眠がれぬ  
壺 歌  
磬の聲花なき寺の静かなり  
目 黒  
花咲て笋飯のさかりかな  
くれなるゐの絹絲櫻綻びぬ  
夕 櫻  
灯のともるたそかれ櫻静かなり  
月 代 の 櫻 に 動 く 夕 かな  
夜 櫻 や 大 雪 洞 の 空 う つ り

落花

夜櫻や十二欄干灯幽かなり  
夜櫻や人静まりて雨の音  
月よひく櫻日にく満てる哉

芳原

大門や夜櫻深く灯ともれり

遅櫻

晚鐘や管の花のちりかゝる  
石塔や一本櫻散りかゝる  
人もなし花散る雨の屋形船  
めらくと落花燃けり大篝  
櫻ちる勿來と馬子の唄ひけり  
遅櫻遅きを花の上手かな

連翹

連翹の雨に亂れてしどろなり

脚岡

山寺や石あつて壇あつてつゝじ咲く  
ところくつゝじ咲くなり屏風岩  
紫の夕山つゝじ家もなし  
裏山につゝじばかりのいはほ哉  
つゝじ咲て飴賣る木曾の山家哉

若菜

塗盆に禿のはこぶ若菜かな  
畦道に若菜つむ少女並びけり  
籠さげて若菜つみく關屋迄

芹

この岡に根芹つむ妹名のらさね  
泥川を芹生ひ隠すうれしさよ

古川や昔女の根芹摘む

下 萌 下萌や寐牛の尻のこそばゆき  
下萌に引く大砲の車かな

春 草 石原やほちく青き春の草  
春の草殺生石はこれかとよ

若 草 離々として若草生ゆる那須野哉  
若草や雞のとさかの一二寸  
若草や驛のはつれの馬頭尊

若草收場や一寸程の馬走る

芳 草 三十六宮荒れ盡して草芳しき

落 臺 其花をさゝげて伸びぬ落の臺

海 苔 海苔はじく音や磯家の夕日和  
海苔の香の向うに安房の岬哉

砲臺に海苔亀朶つゞく浅瀬哉

土 筆 土筆野中の石碑字消えたり

畦道や曲りくの中の土筆

たけ高し棘の中の土筆  
枯草の中やすいく土筆  
竹籠の若菜にまじる土筆哉

杉 菜

何もなき杉菜ばかりの砂地哉

茅 針

遊女老いて茅花まじりの垣根哉

蕨

ゆらくと比良の尾上の蕨哉

虎 杖

分け入つて谷は虎杖ばかりなり

青 麥

麥の葉や緑うなつく五六寸

苗 代

鶯下りて苗代時の寒さ哉

蘆

山賊が飯たくあとの蘆哉  
花蘆討死の塚とこゝろ

蓮 花 草

蓮花草咲くや野中の土饅頭

菜 花

菜の花や岡崎女郎衆人を呼ぶ  
菜の花の少しばかりは見ゆる哉  
菜の花の小村ゆたかに見ゆる哉  
村とこゝろ菜の花見ゆるかな  
家遠近暮れて菜の花はるかなり  
菜の花にそうて道あり村稻荷  
兼平の塚をとりまく菜種哉

菜の花や海をへだて、淡路嶋  
上り帆の菜の花の上に見ゆる哉  
菜種咲いて小村近しと見ゆる哉

大根花 中庭の一本大根花咲きぬ

薊花 花薊毛蟲生るゝ思ひあり

山吹 山吹を踏んで驚く雀かな  
比丘尼来て山吹折て歸りけり

藤花 藤咲きぬ松に一夜を寐て見よう  
明寺に藤の花咲く枯木哉

夏

短夜 松明に夜は明けやすし箱根山  
短夜をいそぐ野寺の木魚哉

短夜のともし火残る港かな  
短夜や火をうつ石に火の走り  
湯釜ぬく汽船の音の明け易し

吉原

夏夜 三味線の静かに夏の夜は明けぬ

立ちよれば焰のあつし閻魔堂  
南瓜の大きくなりし暑さかな



下町や埃を巻いて馬暑し

六月廿日大地震(二句)

地震て大地のさける暑さかな  
すはくと大地のわれる暑さかな

炎天

人絶えて炎天の石壇風渡る  
炎天に聳えて高き巖哉

日盛

日盛りの八百八町焰立つ

五月

旅僧の病むや五月のかゝり船

水無月

水無月の傾城並ぶ格子かな

涼

烏帽子著て汐汲む女裾涼し  
牧方や螢は過ぎて風涼し  
船に寐れば驚落ちて来る涼しさよ  
石抱て樵夫の眠る涼しさよ  
須磨の浦や松に涼しき裸登  
観すれば涼しき夢のうき世哉  
涼し黒し一船は皆丸裸  
涼しさや人去て鷺舟に立つ  
涼しさや石に注連張る山の奥  
涼しさや柳につなぐ裸馬  
涼しさや上野の見ゆる曲り角  
涼しさや夕波くゞる大鳥居  
涼しさや水樓を下る白拍子  
涼しさのはや穂に出でて早稲の花

夏時候雜

涼しさや都を出づるうしろつき

上野清水堂

涼しさや梅も櫻も法の風

題 畫

閑涼し金碧はげて笙の聲

夕顔棚の下涼みのかたに

涼しさや人さまくの不恰好

白河を越ゆるや夏の小商人

虚子を送る

脚躑さける夏の木曾山君歸る

更衣

衣更へて奴の臍のあらはるゝ  
乞食にはならで今年も衣がへ  
更衣城門の太鼓いさましき  
船頭や陸へ出る日を衣がへ

桃雨の病起を賀して一句を贈る

衣かへて青空の色めづらしや

給

故郷のたよりうれしき給哉  
蜻蛉のつまゝれさうな給哉  
石橋を踏みならしたる給哉  
乗合の大勢にならる給哉  
若人の眼鏡かけたたり絹給

青簾

古家や奈良の都の青簾

議事堂や出口々々の青麩

佛生會

山寺に佛生るゝ日の淋し  
卯の花に佛は黒き赤子哉

富蒲葺

大家に菖葺くなり兜町

轄

草の戸の粽に螢來る夜かな

印地打

印地やんで五日の月の上りけり

幟

幟立てる人家は遠し大伽藍  
大風の俄かに起る幟かな  
大幟百萬石の城下かな

田植

鎌倉や田植ゑて歸る人若し  
子を負うて小川飛びこす田植哉

竹酔日

竹植ゑて朋有り遠方より來る

酔

早酔や出舟を呼ばる人の聲  
古家や苔蒸す石を酔の壓

蚊遣

方丈を蚊遣の烟這ひめくる  
何なりと草さしくへる蚊遣哉  
物うつす筆に蚊遣の煙かな  
文机の下を這ひ出る蚊遣哉

勝徳利など並へたる畫に

蚊遣火や暮れて馬子歸ること遅し

蚊帳の中に書燈かすかに見ゆる哉

山寺や蚊帳の波うつ大座敷

瀬をはやみ入り亂れつゝ扇の響

紅の扇と見ゆれ帯の間

うつくしや京の女の扇折

米つきの提げて出でけり大團扇

仁和寺にやごとなき人の夏書哉

蚊帳

扇飼

扇

團扇

夏書

晝寐 傘張の傘に隠るゝ晝寐哉

納涼 大山に我坐して居る涼み哉

石の上に人あり茶あり夕涼

涼み舟團扇の風に帆をかけん

汗 秀吉の頼朝なぶる涼み哉

汗くさしうしろ向たる小傾城

夏瘦 夏やせとしもなき象の姿かな

紙園會 月鉾や傘鉾かけて虹の橋

氷室

水無月の初時鳥氷室守

川狩

川狩や有明近き人の歴

富士詣

水無月の風聞くや石の室

御祓

川風に背中吹かるゝ御祓哉

五月雨

五月雨の雲ばかりなり箱根山  
五月雨の岩並びけり妙義山  
五月雨のふらんとすなり秩父山  
五月雨の曉生ゆらんか蝶の羽

夕立

五月雨の鳥啼く木立庭廣し  
かけ橋や五月雨雲を笠の端  
控木に五月雨の茸並びけり  
牛若の鞍馬上るや五月雨  
うつくしき棺行くなり五月雨  
山門や木の枝垂れて五月雨  
大空やどこにたゝへて五月雨  
城跡の石垣はかり五月雨  
馬で行け和田鹽尻の五月雨  
五月雨の木曾は面白い處ぞや  
夕立の石もふるかと鈴鹿山  
夕立の波のよる見ゆ飛脚船

虚子の木曾路を行くとして旅立ちする時 (二句)

青 嵐

海原や夕立さわぐ登小舟

鳥一つ見えす廣野の青嵐  
破風赤く風縁なり寛永寺

風 薫

古杉や三百年の風薫る

東照宮  
寐覺里

石毎に松もつ谷の風薫る

雲の峰

電信のはりがね多し雲の峯  
裏山の出城崩れて雲の峯  
沙漠千里小草も見えす雲の峯  
海の果や白帆出て來る雲の峯

夕榮や雲の峯々片崩れ  
雲の峯華殿の瀧は涸れにけり

上野眺望

雲の峯凌雲閣に並びけり

夏 の 月

尾の道や帆網をくゞる夏の月

夏 野

家もなし夏野の原の石碑哉  
家あるまで夏野六里と聞えけり  
大砲の車小さき夏野かな  
絶えず人いこふ夏野の石一つ  
十二時の大砲ひゞく夏野哉  
鐵砲の訓練見ゆる夏野哉

夏山

限りなく鐵道長き夏野哉

夏山の六分通りは島かな

夏山や雲湧いて石横はる

夏山や笈おろしたる大女

夏山をめぐらして城の郭哉

夏山の重なりあうて不盡の山

酒賣の夏山越ゆる車哉

夏川

夏川の泥に嘴入るゝ家鴨哉

酒賣の夏川こえて岡こえて

清水

石白く清水湧き出る野中哉

青田

霧雨のふるや青田の朝朝  
横雲に朝日の漏るゝ青田哉

時鳥

縁側へ耳突き出すや時鳥

時鳥鳴くや局の銀屏風

時鳥鳴くや物干竿高し

時鳥鳴くなと申す人もあり

時鳥益傾くる雨の中

時鳥首の浮たる温泉哉

時鳥消ゆやちらゝ鯉船

時鳥人馬の細き麓かな

時鳥月を尋ぬる女かな

時鳥都大路の人通り

時鳥空一はいの月夜かな

時鳥千住あたりは月夜哉  
 山里や大時鳥大月夜  
 石門の中に月あり時鳥  
 淀川の大三日月や時鳥  
 竹槍の穂先に鳴くや時鳥  
 蓬生を飛んで出でけり時鳥  
 山駕籠や屋根の上より時鳥  
 笋の雲にとゞいて時鳥  
 霧嶋やほのほの中の時鳥  
 山寺や晝寐の軒時鳥  
 それでなくとそれにして置け  
 けしからぬ鳥の聲や時鳥  
 ごふくめの垢つく頃や時鳥

父を喪ひし松字のもとに違す

閑古鳥 矢の跡や石に来て鳴く閑古鳥  
 行々子 枝川の其枝川も行々子  
 剖葦や蘆の中行く舟一つ  
 翡翠 古池や翡翠來べき杭の形  
 翡翠や水澄んで池の魚深し  
 翡翠や浅妻舟の人もなし  
 蝙蝠 蝙蝠や大佛殿の晝暗し  
 松魚 草の戸や鯉一切れ月半分



螢

大松魚昔の都荒れにけり

胸形堂に時鳥の飛びたるかたに

初松魚只一聲の夜明哉

竹叢やものにさはらず飛ぶ螢  
石垣や石のあはひの大螢  
裏つたひ雨夜の螢静かなり  
大螢ものすごき夜のけしき哉  
板塀にそうて飛び行く螢哉  
石山の石の裏飛ぶ螢かな  
螢飛ぶ中を夜舟のともし哉  
わきかへる藪蚊の中や家一つ  
大風のあとを蚊の出る山家哉

蚊

蚊の聲もよわる小道の夜明哉  
蚊の居らぬ月見て沖の楫枕

蠅

牛馬の尻並べけり蠅の中  
風渡る孔雀の羽や小蠅舞ふ  
蠅舞ふや太平洋の船の中  
蠅たまる水道尻の小家哉  
雪隠の戸は破れたり蠅の聲  
原中や酒賣いこふ蠅の聲  
上野  
入ること十歩都の蠅をはなれけり

蜻

裾山や蜻の飛びかふ八重葎

蟬

蚤

毛

蟲

蝸

牛

睨まれて閻魔の堂の蟬の殻  
明家の門に蟬鳴く夕日哉

お僧見られよ庵は大蚤大蝨  
傾城のぬけ殻に蚤のはねる哉

神前の鳥居を上る毛蟲哉

蝸牛や寺の屋陰の大梯子

蝸牛や膝行車の屋根の上  
蝸牛の隣の喧嘩のぞきける

石の上に重なりあうて蝸牛  
朝鮮は蝸牛程の大きささよ

題 蚤

殻ともに踏みつぶされて蝸牛

水

馬

川上へ頭をろへて水馬  
水馬枯葉かゝへて遡る

夏動物雑

里長や蠅の牛部屋蚊の木部屋

若

葉

何の木と知れぬ若葉の林哉  
村まばら野寺の若葉見ゆる哉  
三井寺は三千坊の若葉哉  
山に沿ひて汽車走り行く若葉哉  
大弓の的を掛けたる若葉哉  
家あつて若葉家あつて若葉哉

夏木立

舟よせて鳥居を仰ぐ若葉哉  
 大木の幹に矢の立つ若葉哉  
 うれしきは旅より戻る若葉哉  
 憂起  
 天窗の若葉日のさすうがひ哉  
 悼  
 新しき墓の出来たる若葉哉  
 小雨ふる家のあはひの若葉かな  
 山伏の法螺吹き立つる茂り哉  
 宮様のお邸高き茂り哉  
 かたよりて右は箕輪の茂り哉  
 夏木立とろく阪の暗さかな

茂

木下閣

夏木立本堂古りて朱剥げたり  
 夏木立故郷近くなりけり  
 夏木立朱の鳥居の見ゆる哉  
 夏木立村あるべくも見えぬ哉  
 汽車過ぎて山静かなり夏木立  
 其上に城見ゆるなり夏木立  
 大寺の破風見ゆるなり夏木立  
 上野  
 大佛のうしろに高し夏木立  
 俗提げて小尼行くなり木下閣  
 木下閣電信の柱あたりしき  
 下閣やびつくりしたる石地藏  
 木下閣に岩見下す物見哉

猫の塚お傳の塚や木下關  
木下關女後押す車かな

若楓  
若楓軒のともしのうつり哉

ふらこゝや雨に濡れたる若楓

卯の花  
卯の花の闇を吠ゆるや翁丸

泥川や卯の花垣根結ひつゝ  
山里の卯の花月夜鳥啼く

橋  
橋や都のあとの只の家

栗花  
栗の花小窗をくゞる煙哉

椎花  
こぼるゝや日傘の上の椎の花

夏櫻  
夏櫻石を火に焚く山家哉

常磐木落葉  
ほろくと檜の落葉や山妻し

風にちるやたゞ古松葉青松葉  
石壇は常磐木の落葉ばかりなり  
松葉落ちて雀鳴くなり観音寺

夏柳  
櫻田に夕榮すなり夏柳  
車道廣く埃巻くなり夏柳